

地域蘭学研究からの問題

塚本学

Some Issues through the Research of Regional Rangaku

- ① 問題
- ② 普遍的窮理と地域特殊性
- ③ 十九世紀日本人の知識欲
- ④ 一応の見通し

【論文要旨】

蘭学ないし洋学に、封建的イデオロギーへの対立批判面を強く意識する見解と、封建制補強の役割に集約とみる主張との両者に対して、地域蘭学研究は、この構図以外の問題を提起するのではないか。

三都を遠く離れ、学芸の機会が薄かった地域の住民が、オランダを経由した西洋の科学・技術に深い憧憬を抱き、勉学に努めたことの意味を考えざるを得ない。その多くを占めると思われる医師、とくに在村の医師を中心に考えることになったが、これらの現実の課題は多様であり、そこに生きるひとびとと無縁な生き方は許されない。

一方で、中国起源の学問に対して、日本の文化と自然への目が伸びていき、その学風は、各地在住者の参加を促していった時代を受けていた。日本への関心は、そこから排外的な国家主義につながる思潮をも胚胎していた。

このなかで、蘭学への関心を高めていったひとびとは、医療の場での実用や、普遍

的な真理への欲求であるよりも、実事を探求していく姿勢であったのではないか。古
方医の場で説かれた親試実験の精神は、西洋の学問への関心と、地域特殊性への目と
の両者に矛盾なく応じるものであった。この時期各地に育った一見素朴な知識欲が、
植物なども方言名で呼びながら、ドイツ医学文献に熱中していたすがたに、あらため
て目をみはりたい。